

平成29年度  
中四国学生剣道リーダーセミナー  
報告書

「中四国を担うリーダーとしての資質の向上を図る」



担当：中四国学生剣道連盟 副幹事長 山之内 智哉（香川大学）

## 実施概要

日程：平成29年3月10日（金）～12日（日） 2泊3日

会場・宿泊：広島工業大学 沼田キャンパス

〒731-3163 広島市安佐南区伴北6-4104-2

主催：中四国学生剣道連盟

実行委員：山之内 智哉(実行委員長：香川大学)他、中四国学生剣道連盟学生役員24名

特別講師：大城戸知（鹿屋体育大学OB・大阪府警察勤務）

平成28年度 全国警察剣道選手権大会優勝

11日～12日実技指導

担当先輩役員：山神眞一先輩、村井慎治先輩、木原資裕先輩、

廣畑栄三先輩、宮本賢作先輩、原川琢至先輩、石井博貞先輩

## 実施日程

10日（金）

受付・オリエンテーション・実技研修

夕食・入浴・シンポジウム・就寝

11日（土）

起床・部屋の清掃・朝食・審判講習・昼食

実技研修・写真撮影・傷害予防講習・

夕食・入浴・交流会・就寝

12日（日）

起床・部屋の清掃・朝食・実技研修・昼食・

交流試合・閉会式・解散

平成29年3月10日から12日にかけて広島工業大学沼田校舎において中四国学生剣道リーダーセミナーが開催されました。たくさんの大学にご参加いただき、感謝しております。また、特別講師の大城戸知先生をはじめ、山神眞一先輩、村井慎治先輩、木原資裕先輩、廣畑栄三先輩、宮本賢作先輩、原川琢至先輩、石井博貞先輩には、お忙しい中お越しいただき、学生へのご指導ありがとうございました。

この度のリーダーセミナーの詳細についての報告書を作成させていただきましたので、ご査証のほどよろしくお願い致します。

## 1日目 実技研修

リーダーゼミナール初日の実技研修の時間では主に、ホワイトボードを用い、剣道について及びリーダーとは何かといった講義、実践的な技の練習、稽古を行った。ホワイトボードを用いた講義では、「五常について」や、「剣道の特性」「リーダーになるために必要な能力」などについてのないようであった。山神先輩から講義をしていただきながら様々な質問に学生が答え、山神先輩自身の考えと私たち学生の意見を出し合う形式がとられた。仁・義・礼・智・信という五常を竹刀の節に喩えるなど、リーダーにとって一番大切なことは何かなど日頃あまり考えないようなことを考えさせられ、学生にとっては貴重な体験になったと考える。

その後剣道具をつけての実技研修を行った。研修ではまず木原先輩から「面打ち」の指導をいただき三種類の打ち方を学んだ。その場から足継ぎをせずに面打ち、一步足を前に継ぎ面打ち、一步足を後ろに継いで面打ちといったものだ。その面打ちをベースとして面に対しての「出ばな技」、「応じ技」の稽古に発展し非常に分かりやすく実践的な技が身についたと感じた。最後に、まわり稽古を行った。まわり稽古では男女別で行った。初めて剣を交える者や以前から面識のあった者、かつてのチームメイトや先輩後輩関係にあたる者同士など、様々な人と稽古ができ、学んだことも多かったであろう。また木原先輩、山神先輩、村井先輩、宮本先輩に元に立っていただき稽古をつけていただいた。普段はかかることのなかなかできない先輩方に稽古をつけていただき非常に有意義で士気の高い稽古になったと感じた。

(野口 淳宏)



## シンポジウム

近年、大学生の部活動において学生間での不祥事が問題となっている。剣道においても未成年の飲酒喫煙、様々なハラスメントなどにより、大会への出場停止や活動休止処分がくだされている。そこで今回のシンポジウムでは山神眞一先輩を講師にお招きし、学生の不祥事についての現状を把握し、「不祥事0」に向けての取り組みを考えていった。

まず、現状として刑事的責任から過去の大学スポーツの不祥事を紐解いていき、その後、社会的責任という面から解説していただいた。特に、社会的責任は法律上の根拠に基づいた

責任ではないが当事者だけでなく、その団体に関わるすべての人、団体が社会的避難に対する制裁として負う責任である。この責任が、のちの学生意見の中でも重要視され、その組織の中の一人という自覚を強めたのではないかと感じた。

次に、あらかじめ作成したグループ内での話し合いに移った。話し合いのテーマとして、「不祥事0」に向けて、どのような取り組みができるのか、各項目について話し合った。各グループの意見をまとめたものが以下の通りである。

#### 1 「傍観者にならない」

- ① 見ている人が止めに入り、言葉で伝える
- ② 嫌なことははっきりという勇気を持ち周りも止める
- ③ 自分の行動に責任を持ち自他共に飲酒喫煙をしない

#### 2 「第三者の目」

- ① 第三者に意見を求め、稽古と暴力の境目を部内で決める
- ② 部の伝統に固執せず、客観的に見てハラスメントか判断する
- ③ 未成年と成人の席を分けるなど外から見て法令違反と疑われるようなことはしない

#### 3 「思いやりを持つ」

- ① 意味のないしばきをなくす
- ② 体についての発言をなくす
- ③ すすめない、持たせない、買わさない

#### 4 「周りに流されない！」

- ① 見ている人がとめに入る
- ② けじめのある上下関係→先輩が責任を持つ
- ③ 自己管理→してはいけないことはしない

#### 5 「1人1人が剣道部の一員であることを自覚し行動する」

- ① 相手に対する気遣い。相手を尊重。
- ② 困ったときに、対応、対処できるような環境づくり。
- ③ 未成年者の飲酒禁止等の呼びかけを徹底。

#### 6 「勝つためにみんなで作る部の雰囲気」

- ① ミーティングを定期的に行い事が大きくなる前に防ぐ。
- ② 後輩が先輩に意見できる良い環境づくり。
- ③ 飲み会時、未成年、成人を区別（バッジ等で区別）、飲めない人を強要しない。

#### 7 「帰属意識をもつことにより、良好な環境づくりをする」

- ① 意思疎通をとる。
- ② 周りが注意する。
- ③ 外から見分けがつくようにする。（バッジ、シール等）

#### 8 「何でも言い合える雰囲気づくり」

- ①周りが注意できるような空気、信頼関係をつくる
  - ②お互いに思いやりを持って接し、リーダーを中心に周りの人が注意する
  - ③先輩は誘わない、後輩は断る勇気を持つ
- 9 「雰囲気の良い集団を作る」
- ①すぐに相談する。お互いの悪いところを改善する。
  - ②自分の意思を伝える。周りを気にしすぎない。
  - ③ルールを決めておく。上に立つ人が止める。
- 10 「一人一人が責任を持てる集団づくり」
- ①部員同士での話し合いが大切
  - ②止めてあげられる信頼関係が大切
  - ③部内での雰囲気作りが大切
- 11「部員全員で話し合い、1人1人が不祥事を発生させないように自覚をもって行動する」
- ①周りが暴力行為をさせない雰囲気をつくる。
  - ②定期的にミーティングなどをして確認する。
  - ③個人個人が社会の常識をもつ。
- 12 「社会的責任の重さを知る」
- ①自分がされてきたことをしない
  - ②理不尽なことを言えない環境づくり
  - ③周りの人が声をかけて注意する。
- 13 「意識改革」
- ①暴力に頼らない雰囲気づくり
  - ②同級生同士で声かけを行い、させないようにする
  - ③声かけを行い、一人一人が自覚を持つ。意識を高くする。
- 14 「行動する前に考える」
- ①話し合いで解決するようにする
  - ②相手に対して思いやりの心を持ち、自分がされて嫌なことはしない
  - ③やる前にまず自分で考えてみる
- 15 「先輩しっかり！」
- ①ほめる
  - ②最後まで面倒を見る
  - ③一番上がすすめない、とりしまる
- 16 「ハラスメント行為を無くすには」
- ①アルハラ→未成年にはワッペンなどをつける
  - ②お互いに注意して意識する→周囲に気を配る
  - ③部活動の雰囲気づくり
- 17 「部活動の雰囲気→コミュニケーションができる環境」

①意思疎通をする

②相手の気持ちを考えた言動

③未成年バッジをつける

※ 背景が黄色になっているものは、シンポジウム内で意見を聞いた際に特にいい意見だと全員が共感したもの

意見としては、剣道部内の雰囲気作りが多く挙げられた。不祥事が起こらないような関係性を作り上げ、信頼感をもつとともに、剣道部の一員である自覚をもつことが「不祥事0」の第一歩であると考えた。そのためには、今日学んだことを各大学持ち帰り、他の部員へ伝えることが大切だ、というこれからを見据えた意見も多くあり、このシンポジウムを通して中四国の大学の「不祥事0」を目指す意志がみえた。

(小松 未佳)



## 2日目午前 審判研修

中四国学生剣道リーダーゼミナール 2 日目、午前の稽古では審判講習会を行った。この講習会は、審判をする際の正しい作法、動き方を身につけることにより、審判態度の改善を図り、有効打突の基準を統一することを目的としている。これは、誤審を減らし、より良い試合展開を繰り広げていこうという取り組みの一つである。審判の判断によって試合の結果は左右されるため、この講習会はたいへん重要なものである。今回、各大学のリーダーが集まって行っている、リーダーゼミナールにおいて、このような審判講習会を行うことにより、リーダーたちに審判員としての心得、作法を学んでもらい、それを大学に持ち帰り部員に伝えることによって、中四国学生剣道連盟全体の試合の質の向上が見込めると考えている。はじめに、山神先輩から「止め」をかけるときは腕を垂直に上げる、審判旗は白色の旗を赤色の旗で見えないように巻く、といったような審判を行う際の基本的な動きを指導して頂いた。その際、前の審判員との入れ替わり方法についても説明して頂いた。審判を交代する場合は、前の審判員が左を向いて歩き出したと同時に、次の審判員が右足から入る。審判を行う際の注意点を指導していただくことはこれまでも何度かあったが、入れ替わ

り方法についての細かいご指導を頂く機会はありませんでしたため、正確に知っている者が非常に少ない。そのため、今回の講習会が学ぶ良い機会になったと考えられる。その後、男子3グループ、女子1グループの計4グループに分かれ、それぞれのグループに1人ずつ先輩方についていただき、講習会を行った。学生は3人1組の形態を作り、順番にその組で試合と審判を行った。審判をする上で最も大切なことは、審判員3人の位置取りである。主審、試合者、副審で基本的に主審を頂点に二等辺三角形を作らなければならない。主審を起点として試合者の延長線上に副審がいるという形である。この形を試合者が動く中で保たなければならない。そのためには審判者は試合者の動きを予測しながら動く必要がある。このことは多くのグループで指導されていた。特に、副審は主審の動きに合わせて動くため、試合者のことだけでなく主審の動きにも注意を払わなければならないというご指導もあった。試合中、どうしても審判員が1人入り込めず、3人とも同じ場所に固まってしまった場合は止めをかける。このように審判を行う時の位置は非常に重要である。また位置取りだけでなく、審判員の作法についても多く指導していただいた。副審は最初に位置に向かうときは、開始線の内側を通る。審判旗は体側につける。立っているときはかかとを付け、つま先を軽く開く。これらの基本の所作でも意識的に行わなければ蔑ろになってしまうため、注意される者も多く見受けられた。さらに、1本だと思うか、そうでないのか自分の意思をはっきりと示す、1本の基準は試合者の熟練度にあわせるといった1本についての指導もあった。この指導により、自分の中での1本の基準を明確にしておくことの必要性を再認識する良い機会になったと思う。講習会は午前中だけではあったが、学生たちは短い時間で集中して学び、実践することにより、翌日のリーゼミ選手権でその審判員としての成果を発揮できていたと感じた。

(國府 天晴)



## 2日目午後 実技研修

2日目、まず山神先輩のご指導の下、2人1組または3人1組となり、コミュニケーション能力を高めるとともに、中四国の大学からリーダーが集まっているということで、お互いに仲良くなることを目的とした簡単なゲームをいくつか行った。握手した状態でジャンケ

ンをし、勝った者が負けた者の手を軽く叩いたり、足を踏んだりするのに対し、負けた者は叩かれたりしないように避けるような内容のゲームや、山神先輩が考えられた「剣道ジャンケン」という一風変わったゲームなどをした。これらのゲームにより参加者の緊張もほぐれ、お互いに打ち解け合っていたように感じる。中には男女混合のグループを作って行うようなゲームもあり、性別関係なくコミュニケーションがとれていたと思う。

また、この日は大阪県警の平成 28 年度警察大会で優勝された大城戸知先生をお迎えして稽古のご指導をいただいた。まず、竹刀を持ち大城戸先生の号令で、上下素振り、正面素振り、跳躍素振りをおこなった。ここでは 1 本 1 本を大切に、やるからには自分に最大限の負荷をかけるというコンセプトの下、素振りをした。面をつけてからは切り返し、打ち込み稽古、技練習をおこなった。まず、切り返しでは刃筋正しく打つこと、9 本目を打ち終わってからの気持ち・息を切らさず、最後の面を打つようにすることなどのご指導をいただいた。切り返しは剣道の基本が詰まっていると言われてるように、剣道をするにあたり、とても大切なことなので、改めてご指導いただき、基本を振り返るいい機会となったのではないかと思います。続いての打ち込み稽古では、足を使うことに重点をおき、稽古をおこなった。遠間からできる限り足を細かく使い打ち込んでいく。細かい足さばきをすることで、一歩が短くなり隙が生じにくいと考えられる。技練習では、状況を設定した稽古をするようにご指導を受けた。やはり実践では、試合の流れがあるのでただ単に面（小手）に対して応じるのではなく、細かい状況設定にこそ意味があるのご指導いただいた。

この実技研修を通して、リーダーとしての自覚を持つとともに、交友関係も深まったのではないかと思います。それに加え、剣道に対する姿勢もまた、各々、変化してきたのではないかと感じた。また、他大学と交流することによって、様々な方向から物事を見ることができ、リーダーたちも得るものは大きかったのではないかと思います。

(國府天晴)



### 傷害予防講習

2 日目の実技研修終了後には、香川県でスポーツ選手等にトレーニングやコンディショニングを指導している阿部純也先生を迎え、傷害予防講習を行っていただいた。



まずは、自分の身体についてのカウンセリングから始まった。各自の痛みを5段階に分け、痛みの度合いが高い人から、実態を把握しつつトレーニング方法を教えていただいた。次に、実際にトレーニングを交えることで、自分の身体の状態について実感することができた。筋肉の状態や骨との関係を説明しながらの講習であったため、学生にもわかりやすい内容であったように感じる。また、剣道ではおろそかにしがちな、整理運動（クーリングダウン）についてもその必要性を強調されていた。

主将は、部員の健康状態を管理することも重要な役割であるため、今回学んだトレーニングを各大学でも活かしてほしいと感じた。

(小松未佳)



## パソコン研修

リーダーゼミナールの1日目、2日目に学連員7名でパソコン研修を行った。学連員のOBである石井先輩のご指導のもとでの研修であった。今年のオープン大会は広島で行われるため、私たち中四学連が主体となって大会を運営していく。そのため今回の研修は、2年生、3年生が参加したのである。2日間にわたって各大学が受け持つ大会等の仕事の説明、それに加え、オープン大会に向けての内容であった。また、大会を運営するだけでなく、各試合の申込書の作成、あるいはホームページ作成など、様々な分野において丁寧に説明を受けた。そして、今年は香川大学が新人戦を受け持ち、広島大学が来年のリーダーゼミナールを受け持つため、石井先輩や他大学の先輩方からのデータの引き継ぎもあった。一から大会を作り上げ、またスムーズに大会を進めていくにあたって、私たち学連員がこのパソコン研修を受け、より質の高いものに仕上げていかなければならない。また、これから1年生が新たに加わって、どんどん代変わりしていくが、先輩方からしっかり受け継いで中四国がより良くなるように励んでいきたいと思う。

また、私たち学連員のみならず、3日目の最終日には各大学の主務が集まり、パソコン研修を行った。部員登録や、大会の申し込みなど、たくさんの仕事を主務が担っている。大会を円滑に進めるためには、こういった縁の下の力持ちのような存在が大変重要になってくるのだ。今では締め切りまでに申し込みや振り込みなどができていなかったことや、メール

を確認していないことが多々あった。そういったことをなくしていくためには、情報を上手く回していくことではないかという結論に至った。そのため、主務同士で連絡を取り合うことができるように、連絡先を交換しあった。中四国の学生全員が一体となって、あらゆる大会を円滑に、さらに質の高いものにしていきたいと思った。そして、切磋琢磨や交剣知愛という言葉があるように、互いに高め合い、交友関係が広がっていくことを願っている。

(小西未織)

### 3日目 午前 実技研修

3日目午前の部は、2日目の実技研修に引き続き大城戸先生による実技研修であった。まずは、体操、素振りから始まり、大城戸先生に実際に見本を示していただきながら指導をしていただく場面があった。学生にとっては、一流選手の素振りなどを間近で見ること、学ぶべき点が多かったように思われる。

面をつけてからは、繰り返し、基本打ちを行った後に地稽古を行った。繰り返しや基本打ちの際にも大城戸先生に実演を交えながらの指導をしていただき、腕をしっかり伸ばし、打突部位を正確に強く速い打ちで捉えるその姿は、まさに私たちにとってお手本であり、シンプルな動きであっても、私たちとは格が違うことは誰が見ても明白だったように思う。

模範稽古では、小迫選手(環太平洋短期大)、國澤選手(高知大)、惣木選手(広島大)、嶋村選手(香川大)、藤本選手(松山大)が大城戸先生に稽古をつけていただいた。短い時間ではあったが、模範稽古をした生徒は実際に剣を交えたことで、動作の速さや打ちの強さなど、本格的に先生の凄みを知ることができただろう。その中でも、誰もが臆することなく積極的にかかっけていき、この特別な機会を無駄にしないようにしていた。また、見取り稽古をした生徒も、大城戸先生の地稽古を真剣に見て、少しでも自身の剣道に活かそうという向上心が見られた。

地稽古では、先生方にも参加していただき、3列になって2分程度で時間を区切り、一步右へ移動して相手を交代するという稽古を20回程度行った。先生方にはどの列にも入っていただけるように、6・7回終了するごとに隣の列へと移動していただき、学生にとっては、わずかな時間の中でも有意義な稽古をつけていただける機会が多かったように思える。また、他大学の生徒と剣を交えることによって、交流を深めるだけでなく、切磋琢磨し相互にとってためになる稽古が出来たように思われる。今回の実技研修で学び感じ取ったものを、各大学に持ち帰って伝達、共有していくことができれば、確実に中四国全体のレベルを底上げすることができると思われた。

(飯塚 了央)



### リーゼミ選手権

このリーダーゼミナールの最終日には、3日間を通して行ってきた実技研修、審判講習のまとめとしてリーゼミ選手権を行った。この大会のチーム編成は男子2名、女子1名の3人制で、メンバー決めはくじ引きによって行われた。試合前には各チームそれぞれにアップを行い、わずかな時間の中でも共に体を動かし、チーム間の交流を深めた。即席で決められたチームであるが故に、すぐに息を合わせてアップを始めることは難しいかもしれないが、そんなときにも、すぐにコミュニケーションを取り合い、試合に向けて最大限の準備を怠らないことはチームの先頭に立つリーダーに求められる資質の一つであり、今後の人生にも役に立つ能力かと思った。

試合は、つい先ほど編成されたチーム同士の試合とは思えないほど白熱し、普段は他大学のライバルである人達と同じチームで戦うことができるのはこのリーゼミ選手権の醍醐味である。

優勝は、春名選手(愛媛大)、藤本選手(松山大)、國澤選手(高知大)のチームであったが、どのチームも持ち味を活かし、お互いを高め合えることができるような試合をしていたように思う。また、優勝以外でも試合に取り組む姿勢や、チームへの貢献度などが高く評価され、最優秀選手に嶋村選手(香川大)、優秀選手に眞木選手(聖カタリナ大)、荒二井選手(福山大)が選出された。

今回参加した学生は、この大会で学んだことを各大学に持ち帰り、チーム内で共有して、今後の大会に活かしていくことが重要であるように思った。

(飯塚了央)

